

《調査報告》

ニートの意識構造と就労

宇奈月若者自立塾修了生 132 名を通しての研究

2012 年 1 月

特定非営利法人 教育研究所

宇奈月自立塾

## はじめに

2003年、内閣府、経済産業省、厚生労働省、文部科学省の一府三省合同で策定された「若者自立挑戦プラン」を受け、2004年に若者自立塾の計画が厚生労働省から発表された。

2005年、全国20箇所で行われた若者自立塾がはじまり、5年後、28箇所で行われていた。

2009年、当初から5年間のモデル事業であったが、11月に行われた政府民主党の行政刷新会議事業仕分けで正式に廃止になった。後に基金訓練「合宿型若者自立プログラム」に引き継がれたが、2011年4月にこれも事業仕分けにより廃止された。

若者自立塾は概ね16歳から34歳までの「学校に行かず、仕事をしていない、労働訓練を受けてない」ニートの若者に対して、生活訓練を通して、労働観を醸成し、就労意識を高め、社会的自立に向かわせるためのものであった。また、基金訓練においても、若年無業者に対し宿泊型訓練を通し、生活リズムの安定や就労体験を通して就労に向かわせるものであった。

ひきこもりやニートの若者は、社会環境や労働環境を受け、若者自身の意識構造の変化により年々増加傾向にあり今や社会問題として定着した感がある。これらの事業が終わっても困難な問題を抱えた若者は存在する。そのためにも6年間にわたった事業を総括し、今後の若者の施策や支援活動に生かさなければ投入された税金の意味がない。

本来ならば、全ての団体のデータを解析し、ひきこもりやニート状態の若者の実態像を明確にして、いかなければならないところだが、終了した事業であり財源もなく、事業の存在もなくなった団体もあり、現段階ではどうすることもできない。

そこで、たとえ一団体でも、その実態を明らかにすることにより、一つの参考資料になるのではないかと考え、当研究所は基金訓練終了後、報告書を作成するに至った。また、これらの資料はひきこもりや精神疾患との関係も分析してある。内閣府のアウトリーチ事業や地域若者サポートステーションに必要なキーポイントを配慮して作られている。参考になれば幸いである。

2012年1月

特定非営利活動法人 教育研究所  
理事長 牟田武生

## 今回の調査の目的

2005年度から開始した「宇奈月若者自立塾」を修了した110名と若者自立塾廃止後の基金訓練「合宿型若者自立プログラム」を修了した22名の計132名に対して行ったさまざまな調査を基にして、修了生の「意識構造」「精神状況」「就労」「生活」など多様な分析を試みた。

基礎データとしては、「入塾時の状態」「心理状況」「日常生活における観察記録」「修了生の作文」などから、「心理状況」「人間関係」「日常生活」「就労意識」などを分析し、どのような指導、対応を行えばどのようなタイプの塾生が「自立」へと向かっていけるようになるのかを明確に浮き彫りにした。

自立支援の大きな目標として、「就労」などの社会参加を目標として考えることであった。だが、参加者のほとんどが1年間以上ひきこもりや社会不参加を経験した若者達であり、生活訓練・就労意識の醸成の期間は概ね3ヶ月、後に6ヶ月のコースも加わったが、比較的、短期間で自立へと導くことはかなり困難を要するものであった。併せて、精神疾患、発達障害などの困難を抱えていた者も多かった。

そんな困難な課題を抱えた宇奈月若者自立塾の修了生の「進路決定率」は70%を超え、多くの若者を社会参加へと導くことができた。

## 今回の調査研究で解明されたものは

- ・ ニート状態にある若者の「ひきこもり年数」「精神疾患」「就労」との相関関係を明確にすることができた。
- ・ 「発達障害」「人格障害」「うつ」などの障害が就労に及ぼす影響が明確になった。
- ・ ひきこもり年数は3年が就労・不就労の分岐点である。
- ・ 高等学校中退者の中には経済的理由で中退した者が多い。
- ・ 精神保健センターのデータでは、精神疾患のない者は1.0%であるが、本調査では36.7%であった。ひきこもりの者は精神疾患患者であると決定するのは早計であると考えられる。

## 目次

### はじめに

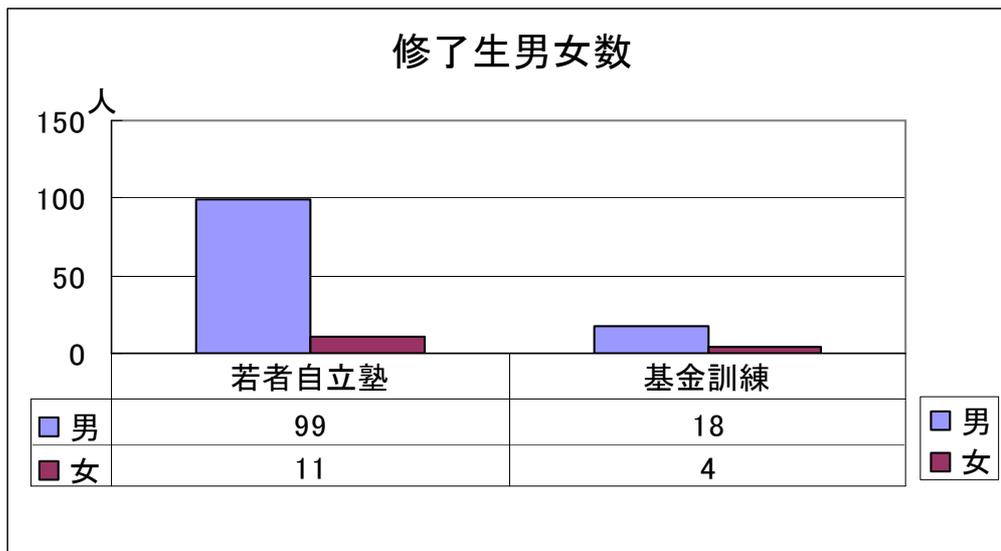
### 調査の目的

1	宇奈月自立塾修了生の人数・男女比・年齢構成	5
2	県別出身者の人数	6
3	家族構成	6
4	学歴/中退	7
5	進路決定率	7
6-1	ひきこもり	8
6-2	ひきこもりと進路決定	9
7-1	精神疾患	10
7-2	精神疾患と進路決定	11
8-1	ひきこもりと精神疾患	14
8-2	精神疾患・ひきこもりと進路決定の割合	14
9	(参考資料Ⅰ) 宇奈月自立塾修了生ひきこもりグループの精神疾患の割合	17
10	(参考資料Ⅱ) YG性格検査からみる宇奈月自立塾修了生の特性	19
11	修了生の感想文から振り返る	23

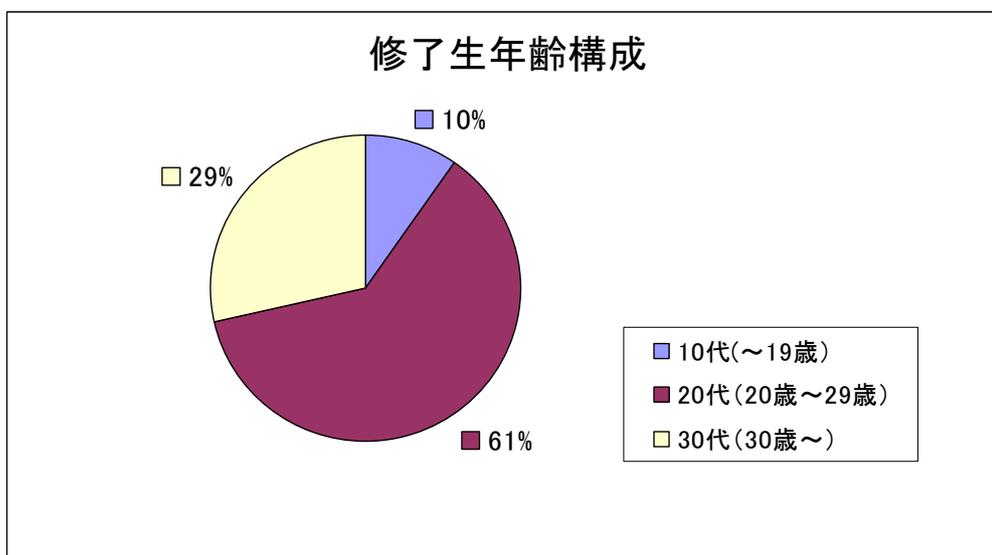
## 1 宇奈月自立塾修了生の人数・男女比・年齢構成

宇奈月自立塾では、2005年から2011年までの6年間の間に「若者自立塾」「基金訓練」合わせると132名の若者が訓練を修了した。人数、男女比・年齢構成は次の様になる。

若者自立塾参加者及び基金訓練「合宿型自立プログラム」参加者には大きな特性の相違が見られないために合算して集計することになった。

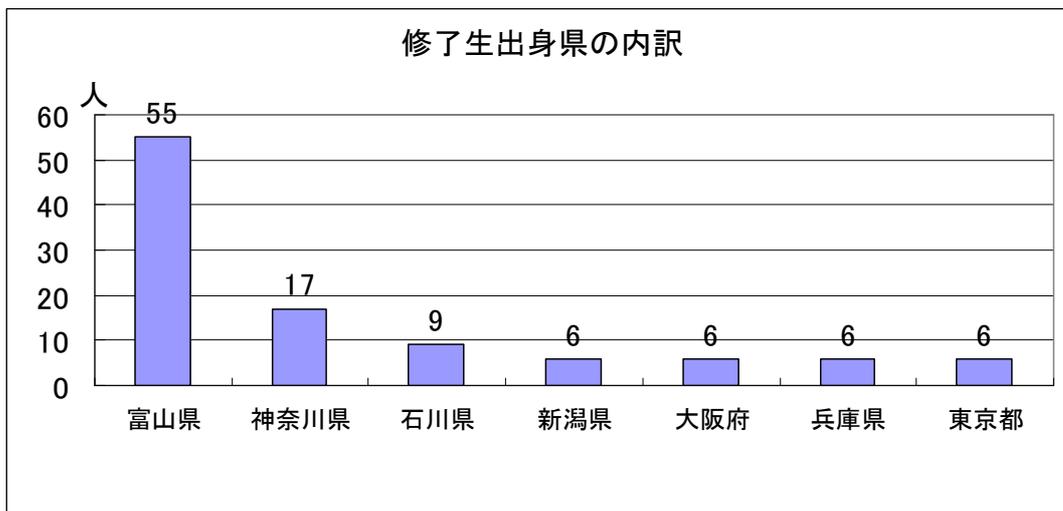


132名のうち、男117名、女15名であり、男性の入塾生が多い。



年齢は20歳代が最も多く全体の60%を占めているが、30代も29%を占めており決して少ない数字とはいえない。平均年齢は27歳であった。また、若者自立塾は当初においては34歳までとなっていたが、後に30代と変わったために、34歳以上40歳未満の参加者もいた。

## 2 県別出身者の人数



出身県は富山県出身者が多いが、全体的には1都1府18県に渡っており、九州、北海道を除く全国から参加していた。

## 3 家族構成

総数 132 人	いる	いない
父親	113 人	19 人
母親	123 人	9 人

父子家庭	母子家庭	両親無し
6 組	16 組	3 組
母子家庭 12.1%		父子家庭 4.5%

2003年国勢調査では、母子世帯は2.7%、父子世帯が0.4%である。比較年度は異なるものの、修了生132名のうち母子世帯12.1%、父子世帯4.5%であり、全国平均と比べるとかなり高い数字である。また、生活保護者も2名参加していた。彼らは訓練終了後、就職して働いており、生活保護から2名とも抜け出ることができた。

#### 4 学歴/中退

	入学	卒業	中退	中退者割合
中学校	2人	2人	0人	
高等学校	48人	32人	16人	全日制高校は 33.3% 全体は 31.1%
通信制・定時・サポート	13人	10人	3人	
専門学校	24人	16人	8人	専門学校中退率は 33.3%
大学(高卒) 検定	8人	8人	—	
大学・大学院	37人	15人	22人	中退率 57.8%
合計	132人	83人	49人	

高校、専門学校、大学(大学院含む)の中退率が、それぞれ 33.3%、31.1%、57.8%とかなり高い中退率を示しており、中途退学からのひきこもり、ニートへの移行が見てとられる。

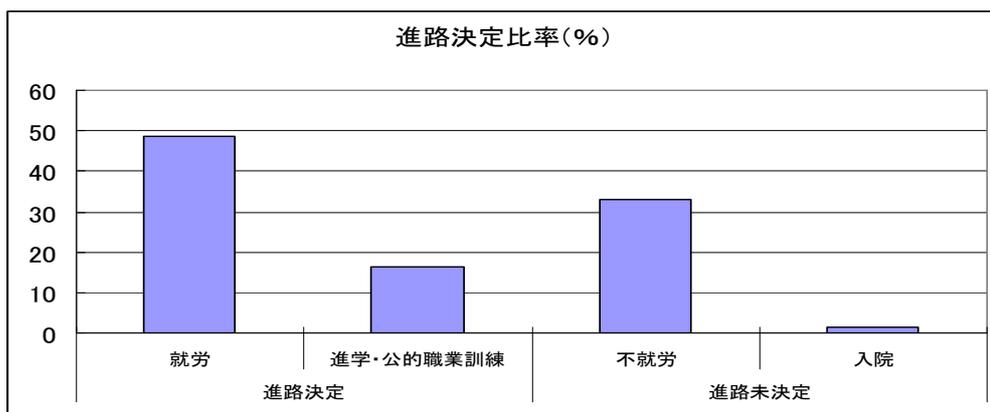
中退理由としては本人の精神的な問題、学力問題、進路変更、人間関係の問題など様々な問題以外にも、経済的な問題で中退に至った事例も多かった。中退者に対し、就職や職種を選択肢の幅を広げるためにも就労訓練以外に夜間や休日に、高等学校の勉強を教え、高等学校卒業程度認定試験を受験させ、全員、認定合格者にした。

#### 5 進路決定率

修了生が訓練終了時にどのような進路決定をしているのかを表したのが次の表とグラフである。就労は正規雇用、常時派遣、登録派遣、アルバイトなど本人が何らかの形で社会参加できたかどうかで判断した。したがって大学や専門学校への進学、公的職業訓練参加も進路決定者と位置づけた。また不就労は、再度のひきこもり、入院などにより積極的な社会参加ができなかった者を進路未決定とした。

その結果、進路決定者は 70.5%の割合であり、進路未決定者は 29.5%の割合であった。

進路決定		進路未決定	
就労	進学・公的職業訓練	不就労	入院
70人(53.0%)	23人(17.5%)	37人(28.0%)	2人(1.5%)



進路未決定者が共通して抱える問題はひきこもりの期間、精神疾患の有無、タイプ（群）の相関が大きな要因として浮かび上がってきた。そこで、ひきこもりの期間や精神疾患の有無及びタイプ（群）の相関関係を掘り下げることにした。

## 6-1 ひきこもり

### ・「ひきこもり」の定義と解釈

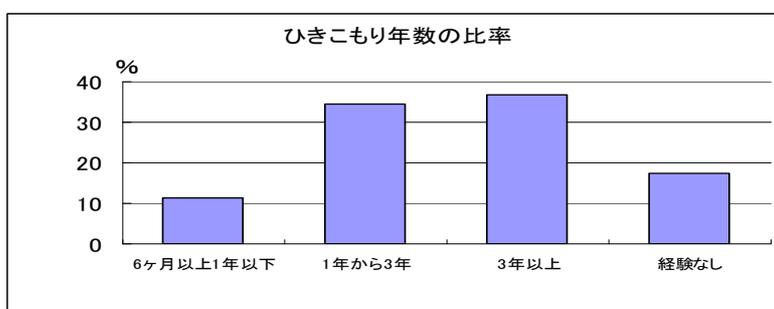
厚生労働省はひきこもりの定義を「仕事や学校に行かず、家族以外の人とはほとんど交流をせず、6ヶ月以上ひきこもっている状態」としている。

宇奈月自立塾の塾生でひきこもりのない者であっても、「学校にも行かず、就労もしていません、労働訓練を一年以上受けていない」ニート群であるので、基本的にはこの定義にあてはまると解釈した。しかし、ひきこもりの定義「家族以外の人とほとんど交流がない」に抵触し、友人関係はあり、交流があった者は「経験なし」とした。

### ひきこもりの年数

6ヶ月以上1年以下	1年から3年	3年以上	経験なし
14人 (10.6%)	46人 (34.8%)	49人 (37.1%)	23人 (17.4%)

ひきこもりの有無は80%以上の者が経験し、経験していない者は20%弱であった。



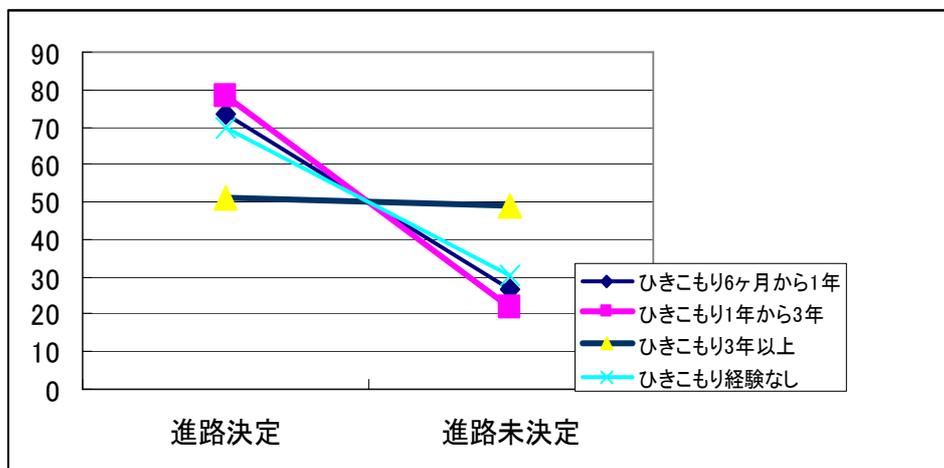
ひきこもりが1年以上の者が70%を超えている。ひきこもりは一度始まると長期化することがわかる。

## 6-2 ひきこもりと進路決定

進路決定の割合をひきこもりの年数との関係から調査した。

進路決定、未決定の定義は進路決定の項目で述べた定義を使用し、ひきこもりの年数との割合を次の表にまとめた。

	進路決定	進路未決定
ひきこもり6ヶ月から1年	11人(78.6%)	3人(21.4%)
ひきこもり1年から3年	36人(78.3%)	10人(21.7%)
ひきこもり3年以上	25人(51.0%)	24人(49.0%)
ひきこもり経験なし	16人(69.6%)	7人(30.4%)



ひきこもり期間が3年未満の場合の進路決定率は70%以上であるが、3年を超えると50%前後になる。進路決定率はひきこもり年数が長期的(3年以上)の場合とそうでない場合との有意差が見られ、ひきこもりからの社会適応は3年が分岐点であることがわかった。

また、ひきこもりの経験のないものは70%弱の進路決定率であった。

## 7-1 精神疾患

宇奈月自立塾に参加した者の中には、精神疾患を抱えた者も多く参加した。それを分析するための基準値を「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」(厚生労働省 2010)における分類基準を採用した。また、群をまたがってある場合は主な症状のあるものとした。

第一群	統合失調症など、薬物療法を必要とする群
第二群	広汎性発達障害など、生活・就労支援を必要とする群
第三群	パーソナリティー障害など、心理療法的支援が必要な群

もう少し詳細に分類基準を示すと

第一群 統合失調症、気分障害、不安障害などを主診断とするひきこもりで、薬物療法などの生物学的治療が不可欠ないしはその有効性が期待されるもので、精神療法的アプローチや福祉的な生活・就労支援などの心理・社会的支援も同時に実施される。

第二群 広汎性発達障害や知的障害などの発達障害を主診断とするひきこもりで、発達特性に応じた精神療法的アプローチや生活・就労支援が中心になるもので、薬物療法は発達障害自体を対象にする場合と、二次障害を対象として行われる場合がある。

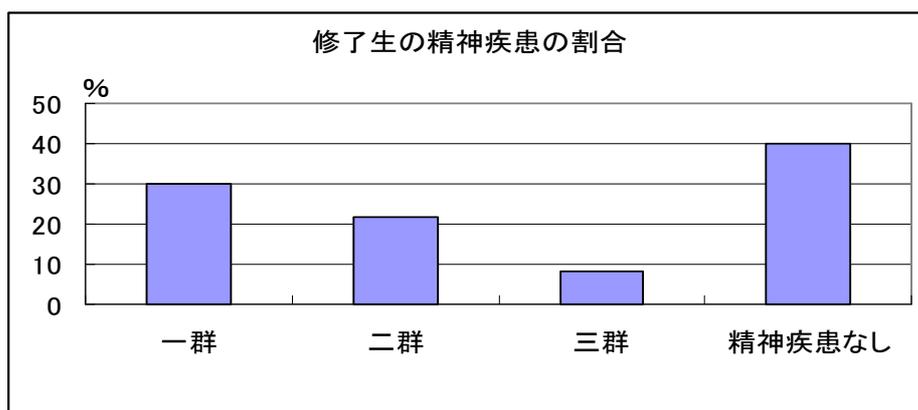
第三群 パーソナリティー障害(ないしはその傾向)や身体表現性障害、同一性の問題などを主診断とするひきこもりで、精神療法的アプローチや生活・就労支援が中心になるもので、薬物療法は付加的に行われる場合がある。

(同ガイドライン 表2 ひきこもりの三分類と支援のストラテジー)

上記分類による宇奈月自立塾の卒業生(132名)の精神疾患の割合は次のようであった。

一群	40人(30.3%)
二群	29人(22.0%)
三群	10人(7.6%)
精神疾患なし	53人(40.2%)
計	132人(100.0%)

一群40名の中に統合失調症の者が11名、うつ10名、強迫・不安神経症19名であった。精神疾患がない者は40.2%であり、60%弱の者はなんらかの精神疾患を持っていた。



## 7-2 精神疾患と進路決定

精神疾患を抱えた若者達の進路決定状況は精神疾患のない若者のグループとどのような違いがあるのか、また病歴によって就労への繋がりはどのような差異が生じるのか、調査した。

分類	進路決定	進路未決定
一群	53.8	46.2
二群	70.0	30.0
三群	70.0	30.0
なし	77.8	22.2

※ 単位は%である

一群の進路決定率は53.8%であり、他は70%であり、精神疾患がない者は77.8%であった。

### 一群の進路未決定者の特徴

一群の進路決定率が悪いのは、次の三点の理由による。

- ・統合失調症の診断を受け、投薬治療によって急性期は終り寛解状態ではあるが、治療継続中である。予後に備え、社会的自立のために訓練を希望した者が、参加し、その該当者が率を下げている。
- ・専門学校や大学を中退したり、社会人として働いていたが、精神的な具合が悪くなり、病院に行き、軽うつと診断され、自宅療養中にひきこもりが始まり宇奈月若者自立塾に参加し、3～6ヶ月の訓練期間を受けた。しかし、社会に出る自信がまだ完全に回復せず、主治医も復学や就労にはまだ早く経過観察が必要というケース。
- ・比較的強い神経症状があるが、薬物療法では効果が見られず、長い間、ひきこもりの生活をしてきたが、転地療法の意味で参加し改善を考えたケース。

### 一群の進路決定者の特徴

- ・統合失調症に罹患しているが、自立塾で規則正しい生活を続け、状態像が改善し、本人の労働意欲がでて、障害者雇用の枠で採用されたケースや障害者就労センターで訓練を引き続き受けているケースなどが多くあった。
- ・長い間、不安・強迫性障害になり、社会不適応状態で悩み、日常生活も精神的に囚われ、専門病院に何度も入退院を繰り返した。しかし、いずれも治療が上手く行かずに、当訓練に参加し、理事長のカウンセリング結果、非常に良くなり、就職し、社会人として独立立ちした事例も数例あった。
- ・軽うつに掛っていたが、社会に対する見方や労働観が変わり、また、人間関係のスキルが向上し、再就職していったケースなどが多かった。

### 二群の進路未決定者の特徴

自己の評価と他者の評価に大きな違いがあり、他者評価を独自の価値観により、受け入れられない特徴が共通する。

- ・30代で10、20代での就労体験がなく、しかも発達障害の概念が、まだ社会になく、特性に応じた教育や訓練がなされてなく、社会不適応の状態像が長期間（3年以上）に及んだケースが多い。
- ・20代でありながら、発達障害の診断を受けず、I Qが70前後のボーダーラインであるが、全日制普通高校を卒業し、一般就労を望んだが就職が決まらず、その内、社会不適応状態になったケースが多い。
- ・自分自身がアスペルガー症候群であることが分からず、大学を卒業し就職したが、職場の人間関係や共同作業が上手く行かず、就職、退職を繰り返した。そのような職務経歴から就職試験に受からなくなった。本人自身がアスペルガー症候群であることを受け入れられず、特有の職種に対するこだわりから就労が続かないケースなどがあった。
- ・知的障害があるにもかかわらず、全日制普通高校を卒業し、一般就職試験を受けるが内定を受けることができず、また、能力的にも一般就労が難しいケースなど。
- ・発達障害を明らかに持っているが、自分の能力を客観的に理解出来ず、希望職種と大きな乖離があるが、職種に対する特有なこだわりのために、それらの就労できないケース。
- ・特性に応じた才能でプロとして仕事をしようとするが、そのレベルに達しないが、能力を伸ばす努力を怠る者やプロとしての才能が至らない者。

### 二群の進路決定者の特徴

ほとんどの者が重度の広汎性発達障害を持ち、長い間、ひきこもりをしていた者が就労及び進路決定率70%は驚異的な数字である。

- ・3歳児や入学時検診で発達障害と診断され、幼児期にADHD特有な行動や小学校に上がり、LDがあることがわかり、特性に応じた教育や身体を動かし、一生懸命働くという労働観が両親や保護者によって形成された者など
- ・発達障害であるが、知的障害者として障害者雇用で働くケース。

- ・ 広汎性発達障害を持っているが、こだわりが少なく人間関係や状況認識が比較的できる者
- ・ 自分の障害を理解し、その障害をカバーする努力を惜しまない者

### **三群が持つ特徴**

ほとんどの者がパーソナリティ障害以外に複数の人格障害を併せ持っている。障害の程度により、普通に就労できるケースと全く社会適応できないケースとの差異が激しい。

### **三群の進路未決定者の特徴**

- ・ 人格障害から学校や職場で認識の違いや自分の感情がコントロール出来ず、不適応を起した。その後、引きこもり、自分自身がやろうとすることが上手くできず、反対されると家庭内暴力に及ぶ事例が多かった。家族の強い希望で入塾したが、就労体験しても、まだ、就労の段階にない者や就労が決まっても、仕事が続かない者が多かった。
- ・ 人格障害が進み、就労支援よりも社会不適応や反社会的行動をいかに予防するが実際的には課題であった。中には訓練期間を延長し、その後、就職し、社会的自立した者もいた。
- ・ 解離性同一性障害（多重人格）の者は、例え、就職しても職場の人間関係でトラブルを起し辞める傾向が強かった。その点、性同一性障害の場合は決定、未決定には大きな影響はなかった。

### **三群の進路決定者の特徴**

- ・ 人格障害においても比較的軽度の軽い者は進路決定率が高かった。
- ・ 自分は少し変わっている、変であるという自覚があったが、寮生活を通しそれが明確にわかり、それを受入れ、自分自身に対する理解が深まったケースなどが多かった。

### **精神障害「なし」の進路未決定者の特徴**

- ・ 精神障害ではないが「何で働かなければならないの」といった考えが根底にあり、労働観が持てず、働く意欲が3~6カ月では形成されずにダラダラとした生活態度の者
- ・ オンラインゲーム依存者で3~6カ月の訓練期間では、仮想現実の世界から抜け出すことができなかったケース。
- ・ まだ、精神的に幼く、労働する＝生きて行くことの意味付けが3~6カ月では成長しきれなかったケース。
- ・ モラトリアム状態があり、まだ、自分が何をしたいのかの結論が出ずに先延しする者。

### **精神障害「なし」の進路決定者の特徴**

- ・ 学校卒業や中退後、就職活動をどのようにしたら良いのか、ハローワークに対して敷居の高さを感じて就職活動が出来なかった者
- ・ 「働く」「社会に出る」ことに何となく不安を感じたり、自信が持てなかった者
- ・ 自分のできること、向いている仕事に分からず、様々な就労体験を通して、自分自身を理解し、自分にあった仕事を探し、就職をしたケースが多かった。
- ・ 就労体験をして、自分は大学に行き学習をしてからでも遅くないと感じ、大学に進学した者。

## 8-1 ひきこもりと精神疾患

本調査では修了生のひきこもり年数を「6ヶ月から1年」「1年から3年未満」「3年以上」「ない」の4つのグループに分けた。しかし、他調査と比較するために3分割してみた。分類上「6ヶ月から1年」のグループと「1年から3年」のグループをまとめて「3年未満」として作成したのが次の表である。

表からわかるように、

一群、三群に属する若者の大半は「ひきこもり」を経験しているが、二群、または精神疾患のないグループは必ずしも全員が「ひきこもり」を経験している訳ではない。

二群では33.3%、精神疾患のないグループは24.1%の割合で「ひきこもり」を経験していない。

ひきこもり経験 (%)			
分類	3年以上	3年未満	ない
一群	48.7	48.7	2.6
二群	20.0	46.7	<b>33.3</b>
三群	70.0	30.0	0.0
なし	31.5	44.4	<b>24.1</b>

三群の者はひきこもり出すと長期化する傾向にある。長期化した者は障害が重い者が多い。一群の者は3年未満と3年以上では出現率は同じであるが、治療の進展具合によって長さに相違が生じる。

二群の者の33.3%はひきこもりがない。特にADHDの傾向がある者やその傾向が強いアスペルガー症候群は籠らない。そのため、不登校経験のない者もいる。また、長期化する率も低い傾向が、精神疾患のない群と比較してもいえる。

## 8-2 精神疾患・ひきこもりと進路決定の割合

・一群のひきこもり年数と進路決定の割合

ひきこもり年数	進路決定者	進路未決定者	不明
3年未満(19人)	15人(78.9%)	2人(10.5%)	2人(10.5%)
3年以上(19人)	11人(57.8%)	5人(26.3%)	3人(15.8%)
経験なし(1人)	1人	—	—

一群の者でひきこもりが3年以上になると、進路決定率が下がる。また、ひきこもり3年以上の者は統合失調症の者が多い。

・二群のひきこもり年数と進路決定の割合

ひきこもり年数	進路決定者	進路未決定者	不明
3年未満(14人)	8人(57.1%)	4人(28.6%)	2人(14.3%)
3年以上(6人)	3人(50.0%)	3人(50.0%)	—
経験なし(10人)	8人(80.0%)	1人(10.0%)	1人(10.0%)

二群でもひきこもり経験のない者の進路決定率は高い。また、ひきこもりが3年未満の者も進路決定率は高い。しかし、3年以上のひきこもりが長引くものは、二群以外に他の精神疾患（一群の強迫性障害等）が二次症状と併発しているケースであった。

また、本調査では該当者はいなかったが、二群で統合失調症に掛かっているケースは1%の割合でいる。

・三群のひきこもり年数と進路決定の割合

ひきこもり年数	進路決定者	進路未決定者	不明
3年未満(3人)	3人(100%)	—	—
3年以上(6人)	3人(50%)	—	3人(50.0%)
経験なし(0人)	—	—	—

母集団が少ないので分析不能である。

・精神疾患のない者のひきこもり年数と進路決定の割合

ひきこもり年数	進路決定者	進路未決定者	不明
3年未満(24人)	22人(91.7%)	2人(8.3%)	—
3年以上(17人)	11人(64.8%)	4人(23.5%)	2人(11.8%)
経験なし(13人)	12人(92.3%)	—	1人(7.7%)

ひきこもり経験のない者の進路決定率は高い。また、ひきこもりの長さが長いほど、進路決定率は悪くなる。「待ちましょう」「様子みましよう」で長期間対応することは誤りであることは明確である。

精神疾患を伴わない者が本来のニートであり、適切な支援をすることによって、社会的自立する割合は非常に高い。

精神疾患とひきこもりの長さ

一群のひきこもりについて（統合失調症を中心に考える）

「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」では、ひきこもりの定義を『ひきこもりは原則として統合失調症の陽性あるいは陰性症状に基づくひきこもり状態とは一線を画した非精神病性の現象とするが、実際には確定診断がなされる前の統合失調症が含まれている可能性は少なくないことに留意すべきである』としている。

私たちが、この調査で扱う一群でひきこもり期間が長いのは、確定診断を受けた統合失

調症の者 9 名と非確定診断の者 2 名である。そのうち、1 名が陽性症状を示し、残り 11 名は陰性症状であった。厚生労働省のガイドラインからみると、9 名はひきこもりの概念に入らない者かもしれない。しかし、修了生 132 名中、統合失調症の者は 11 名（その中で 2 名は入寮時、確定判断を受けていなかったが当方で統合失調症であると判断し、病院を紹介後に確定診断を受けた）で 8.2%であった。

11 名は原則的には 6 カ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続け、担当医以外とは関わらず、医師が紹介するデイケアにも参加しなかった者であるので「ひきこもり」である判断しても問題はないとした。

日本精神神経学会のデータでは 1%であり、生涯発病率は 0.85%である。人口比で考えると 110 万人弱、発病率だと、93.5 万人程度いる筈であるが、日本で治療を受けている人は 80 万人程度であるとされている。残りの人はどこに存在するのか、仮にひきこもりが 100 万人いると、その 8.2%は 8,2 万人であり、これを加えると 88.2 万人である。いずれも推定のはなしであるが、発病率に非常に近づく。

陽性の場合、人格崩壊が急激に進み、攻撃的な側面も現れやすく、家庭生活を営めなくなり、病院に行かざるを得なくなる。このタイプはひきこもりが長期化することは考えられない。それに対し、陰性症状は全てに意欲が低下し、大人しく自閉的傾向を示す。しかし、疫学的にそんなに陰性症状の統合失調症が存在するのか、非常に興味がある数字である。

## 二群のひきこもりについて

広汎性発達障害（PDD）の者は、一、三群はひきこもりを併発し易いが、二群の 33.3%がひきこもりを引き起こしていないことから発達障害の者は、必ずしもひきこもりをとまわらないと考えてよい。対人関係の困難さを抱え、その上、こだわり・興味の狭さがあり、IQ70 以上の者をアスペルガー症候群としている。それに高機能自閉症を加えた者を高機能広汎性発達障害（PDD）と呼ぶ。これらは症候群であるから、注意欠陥多動性障害（ADHD）と呼び、多動性という症状が伴っており、多動性ゆえひきこもらないとも解釈できる。

## 三群のひきこもりについて

これらの人とのカウンセリングで得たことは、三群の人格障害、身体表現性障害、同一性障害は廻りの人を巻き込みやすい障害であり、しばしば、加害者にも被害者にもなりえる障害である。

自分が起こした問題行動を上手く認識できずに、他人のせいにして、問題をさらに、大きくさせてしまい。そのことにより、他人との人間関係が円滑にできなくなることで、ひきこもりが起きる。

その点、一群の人は自分自身の抱える精神的な障害で動けなくなり、自らひきこもってしまう傾向があった。そして、例え、投薬を受けても症状が改善せず、同じ状態像が継続

するので、一度ひきこもりがはじまると 3 年以上の長期間ひきこもるケースが多い。そのため社会適応するのに、本人自身も、援助者も多大な努力を要する。

### 精神障害「なし」の人のひきこもり

これらの人はごく普通の人と考えて良い。ただし、病的ではないが、心理的に付加が掛って身動きできなくなる心因性のものか、無気力で自分の好きなことしかやりたくないという労働観が形成でき難いタイプの者のどちらかであった。また、ネット依存の者がこの中に入る。

## 9 (参考資料 I)

### 宇奈月自立塾修了生ひきこもりグループの精神疾患の割合

精神保健福祉センターが行ったひきこもりグループの精神疾患状況を調査した 144 名の母集団との条件を統一するために、宇奈月自立塾修了生 132 名のうち、6 ヶ月以上のひきこもりを経験しているもの 109 名を抽出して比較検討した。

#### ◎132 名のひきこもり経験の有無の分布 (P8 ひきこもりの年数再掲)

6 ヶ月以上ひきこもり経験あり	経験なし
109 人	23 人

#### 施設目的による違い

同じひきこもり集団であっても相違としては、施設目的により、利用者によって違いがある。精神保健福祉センターの利用者は何らかの精神疾患を抱え、その解決のためにセンターを訪れた者であり、宇奈月自立塾の場合は社会的自立をめざし、就労の基礎訓練を受けに来た利用者である。無論、宇奈月自立塾でも精神医療を必要とする者は医療機関を紹介し、投薬をしても、医療機関が訓練の必要な者、治療をしながら労働訓練を受けた。また、特色として、合宿型であるため、全ての者が生活・就労訓練をしながら、必要な場合は精神療法としてのカウンセリングを行った。

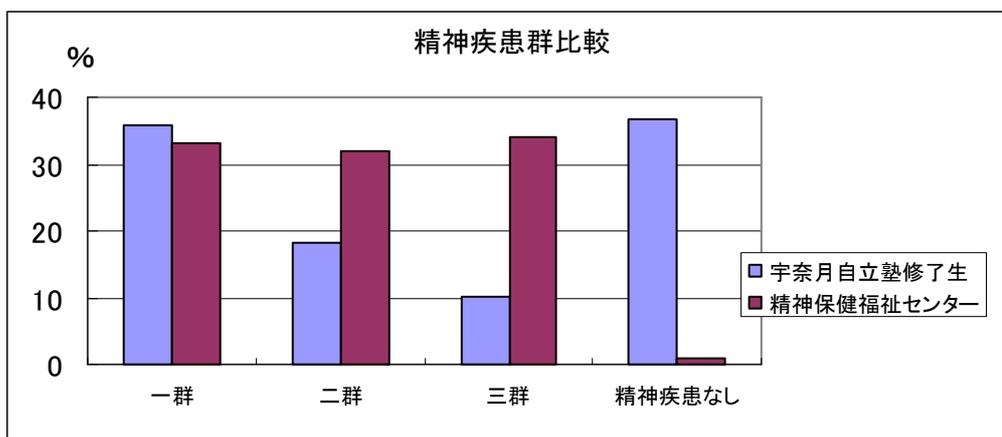
精神保健福祉センターの場合は精神科医による確定診断に基づく群の分類に対して、宇奈月自立塾の場合、確定診断を受けている者と 30 歳以上で広汎性発達障害などの診断基準が明確でない者で、今日まで診断を受けずに来た者も相当数いる。それらの者は 3 ヶ月ないし 6 ヶ月の生活訓練の中で、この問題に 40 年近く係わったベテランのカウンセラーが WISK-III を用い判断した。

また、地域性の問題を排除するために、利用者の地域性においても、精神保健福祉センターは全国調査であるが、宇奈月自立塾においても出身者の県データに示すように、準全国調査と言っても良い。

	一群	二群	三群	精神疾患なし
宇奈月自立塾修了生ひきこもり群	39人	20人	10人	40人

	一群	二群	三群	精神疾患なし
宇奈月自立塾修了生ひきこもり群	35.8%	18.3%	10.1%	36.7%
精神保健福祉センター	33.0%	32.0%	34.0%	1.0%

これを参考までに精神保健福祉センター外来調査（144名）と比較してみる。調査研究は2007年から2009年に行われた厚生労働科学研究「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究」データである。



二群、三群においては精神保健福祉センターが多く、精神疾患なしでは、宇奈月自立塾の方が高かった。これは施設の目的による違いであると判断できる。

また、精神保健センターのデータでは、精神疾患のない者は1.0%であるが、本調査では36.7%であった。ひきこもりの者は精神疾患患者であると決定するのは早計であると考えることができる。

## 10 (参考資料Ⅱ)

### YG 性格検査結果からみる修了生の特性

宇奈月自立塾では、塾生の的確な指導のために心理検査を行っており日常の支援活動の指標としている。行っている検査類は「YG 性格検査」「クレペリン検査」「職業適性検査」などであり、本人の性格、気質、作業性などの把握に役立てている。特に「YG 性格検査」は本人の気質を判断する心理検査として、日常生活、就労支援の時のデータとして利用している。ここでは、検査類の中から「YG 性格検査」の分析を行うことにより、修了生のタイプ判断を試みた。

修了生 132 名の「YG 性格検査」の判定割合は次のようであった。

A 類	B 類	C 類	D 類	E 類
22 人 (16.7%)	13 人 (9.8%)	23 人 (17.4%)	5 人 (3.8%)	56 人 (42.4%)

判定不能 1 人

※ YG 性格検査のタイプ判定について

120 項目の質問の結果から、情緒性、社会性、活動性、内省的判断、主観など 12 の項目を判定し、次の五つの類に分ける。

#### A 類 (平凡型)

すべての性格特性については平均またはそれに近い状態を示す人で、万事につけてとりたてて特徴を示さぬ人である。換言すれば平凡性を持ち、積極的にこれとって診断をつけにくいタイプの人である

#### B 類 (不安定不適応積極型)

情緒不安定、社会的不安定、活動的、外交的でパーソナリティーの不均衡が直接外部にあらわれやすいタイプである。このため反社会的行動を起こしやすく、環境の不遇や、知能の低さが伴うと反社会的行動に向かいやすい傾向をもったタイプである。

#### C 類 (安定適応消極型)

情緒的安定、社会適応、消極的内向性でおとなしく問題をおこさないタイプである。小さくまとまっていて、良いことも悪いこともしない内向的に安定したタイプである。

#### D 類 (安定積極型)

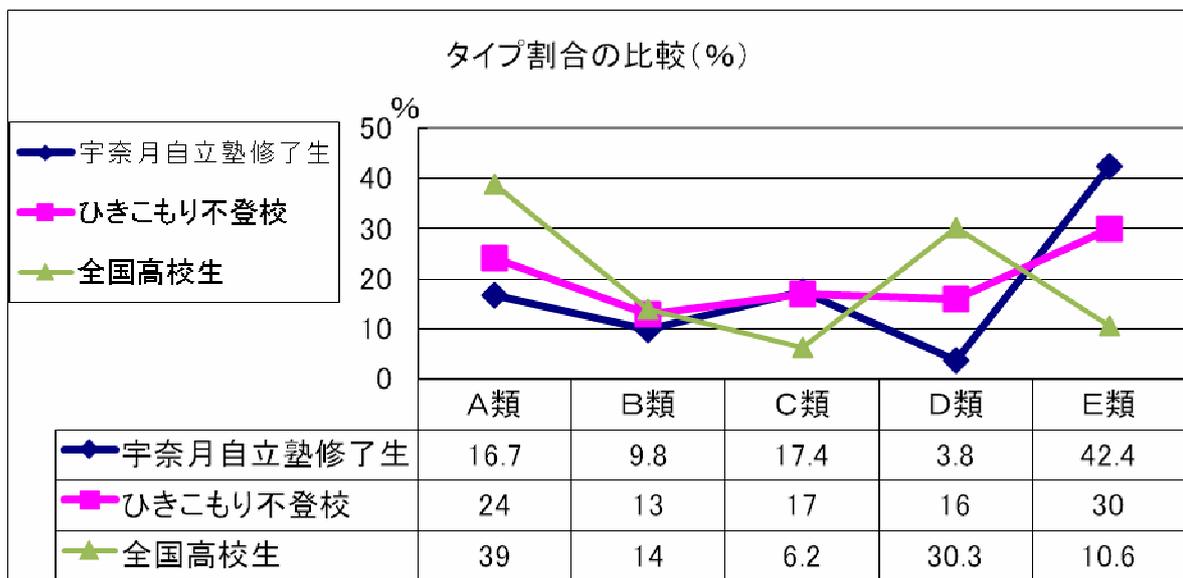
積極性があり、情緒的にも安定しており、外交的で性格の良い面が外部にあらわれやすいタイプで、調和的、安定的な行動をとるリーダーシップ型である。

#### E 類 (不安定不適応消極型)

情緒不安定、社会不適応、非活動的、消極的など性格の弱い面が内向し、自らの内部に問題を持ちやすい適応力の弱いタイプである。

## タイプの分類比較

前述した、タイプの割合が、他の集団と比較してどのような位置づけにあるのかを比べた。比較データは、NPO 法人教育研究所が平成 15 年度に調査したひきこもり不登校 150 人、全国高校生との比較である。(全国高校生のデータは YG 検査手引書からの引用)



タイプ割合の比較から、「宇奈月自立塾修了生」のタイプ分布を考察する。

平均年齢は「全国高校生」が 17 歳、「ひきこもり不登校」が 15 歳、「宇奈月自立塾修了生」が 27 歳であり、年齢構成、調査年月日がそれぞれ異なっているが、「全国高校生」の分布割合は 10 代、20 代の平均的な若者の分布状況と大きく乖離する事はないと推測できるであろう。そこで「全国高校生」グループの割合を大きく上回っている「C 類」「E 類」の分布について述べる。

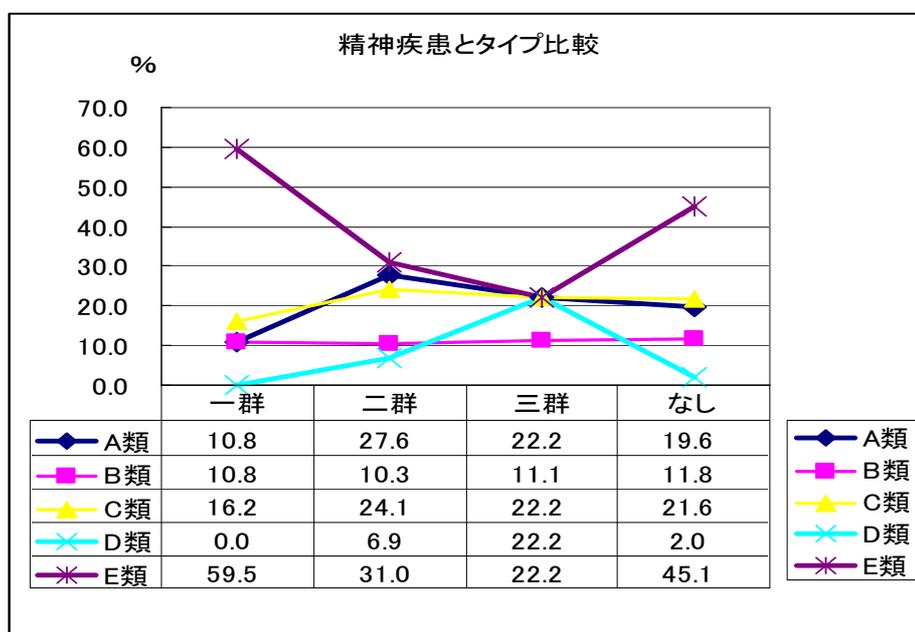
「ひきこもり不登校」のグループとニート群である「宇奈月自立塾修了生」の「C 類」がそれぞれ 17.0%、17.4%、「E 類」が 30.0%、42.4%と「全国高校生」の 6.2%、10.6%を大きく上回っている。特に「宇奈月自立塾修了生」の「E 類」の占める割合が全体の半数近くを占めており、かなり強い偏りを持った分布になっている。タイプ分類としては「C 類」「E 類」ともに「消極性」を伴った気質であり、「人間関係」「社会性」等において積極的に係わりを持とうとしない生活環境のなかで過ごす傾向が強く、「ひきこもり」「ニート」に結びつきやすい意識構造を持っていると推察される。「C 類」のグループは、「消極性」であるが「情緒的には安定」しており、一群のような病的疾患に結び付くケースは少ないと考えられるが、「E 類」のグループは同じく「消極性」であるが「情緒不安定」を伴い、ひきこもりの長期化により一群のような精神疾患を誘発するケースがみられる可能性が十分考えられる。

そこで、「宇奈月自立塾修了生」の半数近くをしめる「E 類」と精神疾患との関係はどのように位置づけられるのか次に検証する。

### 修了生の 42.4% を占めている「E 類」についての分析。

「E 類」は「不安定不適応消極型」であり、陰性感情が強く、何事についても自信がなく、人間関係においても消極的である。ただこのような性格形成は本人が本来獲得している気質の上に環境的な要因が大きく作用して形成されると考えても構わないだろう。次に述べるように「E 類」と精神疾患の関係は密接な関係があり、「長期的なひきこもり経験」からくる環境要因が強く影響していると判断出来る。

精神疾患とタイプ比較



A, B, C, D 類における、それぞれの精神疾患の分布割合は、一群、二群、三群、なしといずれのグループにおいても大きな差は認められなかった。しかし、「E 類」の分布は一群において、占める割合が突出している。これは「E 類」のグループの意識構造が、いわゆる「統合失調症」「うつ」などの心理意識構造と近いものがあり、その結果一群のグループの大半を「E 類」が占める結果になったと推察される。また精神疾患のないグループも同様に「E 類」の占める割合が大きい、「一群」と「なし」のそれぞれのグループの「E 類」の特徴として次のようにひきこもり年数の分布に有意差が認められた。

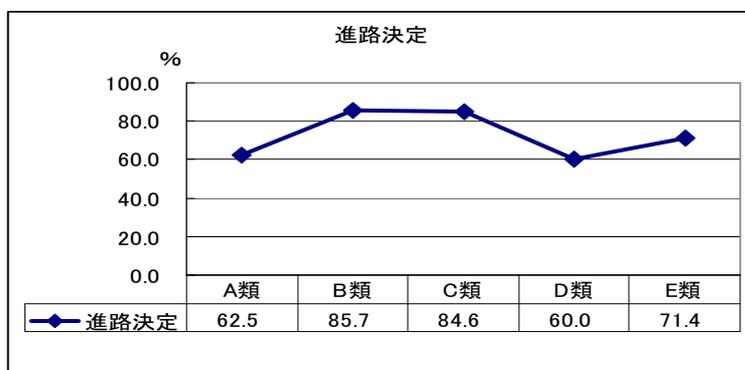
E 類 56 人	6 月から 1 年	1 年から 3 年	3 年以上
一群 (22 人)	0 人	9 人 (40%)	13 人 (60%)
なしグループ (23 人)	6 人 (26.1%)	8 人 (34.8%)	9 人 (39.1%)

「E 類」のなかで一群に属するグループは、ひきこもり経験が長期化している傾向がみられ、なしのグループはひきこもり年数が比較的短いと判断できる。

### 「E類」の進路決定状況

前述したように「E類」の特性として、「情緒不安定」「社会不適応」など本人が自立へと向かう場合さまざまなハードルを乗り越える必要がある。この特性は適切な「指導」「支援」を行わなければいわゆる「社会参加」が困難であると考えられ、ニートの大半は「E類」的な特性を保持していると推測できる。しかし「情緒不安定」「社会不適応」などは決して本人の職業能力の低さを示すものでなく、適正に応じた「指導」を行い適正な「環境」の中で生活することにより、本人の最大能力を十分発揮できると考えられる。次のグラフはそれぞれの「宇奈月自立塾修了生」進路決定率を表したグラフであるが、「E類」の進路決定率は他の類とほとんど変わらない。

精神疾患と進路決定の割合



これは「宇奈月自立塾」における「合宿生活」「自立支援プログラム」等により

- ・「生活を通じた、人間関係の協調性の習得」
- ・「さまざまな就労体験による自己適正職業の把握」
- ・「グループダイナミクスによる自己分析」

などによって、「自信の回復」「マイナス思考からプラス思考へ」「仲間意識」などが自己構築され「社会参加」が十分可能になっていくものと判断できる。

## 11 修了生の感想文から振り返る

入塾の動機、

寮生活を始めて2週間後前後

修了時(3ヶ月または6ヶ月後)

3つの観点から、修了生の感想文から分析を行って見ることによって、彼らの視点から合宿型自立支援とはどのような意味があったのか考察した。

### 1、入塾の動機

基礎データにあるように多くの入塾生がひきこもりや精神疾患を抱え、自宅で時には悩みながら自分の不甲斐なさを責め、医療機関に行けば投薬量が増えるだけでさらに精神状態の悪化が起きる状況に苦しみながら死の不安に時には怯え、あるいは自分の弱さに流されながら社会に出る自信のなさや不安を抱え、家族に支えられ、時には叱咤激励されるが、自立への道筋が見えず、悶々とした生活を送らざるを得なかったと供述していた。そんな自分を振り返り、修了後の感想文では、自分自身の精神的な弱さをさらけ出している人がいる。原文のまま修了生の声を記載する。

「自分は汚いと思います。だから、お皿とか、コップとかを使うと、みんなに汚れがうつる感じがします。お風呂入る気力がなくて、入るとなかなかぬけでれない感じがします。部屋も私がいると臭いとか、汚い菌みたいのがこもる感じがします。みんなに悪く言われているように感じます。本当は悪くなんか言ってないと思います。だけど、足音、声を聞くと悪くって泣いてしまいます。自分が自分じゃない気がします。この世に私の居場所があるのでしょうか？頭の中がごちゃごちゃです。目もぼやけます。」(23歳女性)

「自分はだらしなさをきわめているようなものでした。昼夜逆転も多く、仕事の面接も落ちてばかりでした。別にいいわけをするつもりはないのですが、私は19の時、精神的な病気にかかり、一度入院し、通院していました。そして、そのような病気とはほとんど一生付き合っていかなければならないことがわかりました。しかし、病気と闘っているうちに何年ものブランクが生じ、仕事の面接も落ちまくりました。そこで聞いたのが、ここ(自立塾)でした。私は何年ものあいだ休んでなまってしまった心とからだをたてなおせるのではと思いました。しかし、いろいろな面で他人と差がついていることを思い知らされました。体力も上のコンビニに行くにも休み休み、つかれながら行き、食事をしたくとも野菜の切り方等がうまくできず。あとかたづけも、疲れすぎてできません。」(28歳男性)

「心が今、壊れていきそうなんです。生きているのが辛いのです。なぜなら、こんな歳になっているのに私、心が生きていないんです。馬鹿みたいに思うかもしれませんが、1か

ら10までがわからない状態なのです。四六時中不安に苛まれるんです。一体どうしたら克服できるのでしょうか。私自身が弱い為、苦しい思い、辛い思いをたくさんして来ました。両親は理解してくれません。」(33歳女性)

「不景気で仕事が少ない状態で苦しい生活をしていたところに失恋してしまい。死んでしまいたい、生きていても仕方がないと思うようになってしまいました。病院に入院しようかと思いましたが、せつかなので自立塾で苦しいだろうけれど、職業トレーニングなるならと思い」(28歳男性)

「私は宇奈月自立塾に入ることにした理由は自分の精神的な成長を得るためでした。私は社会においてブランクがあり、非常に内面が年齢的にそぐわない幼稚な部分がありました。独りで居てもなかなかその短所は直しにくく、自立塾に頼り、自ら親元を離れ、自力でこの合宿生活を通して努力をもって乗り越えてゆく決断をしました。私は他人に対して甘えがあり、自分の主張通さないと、気が済まない一面があったり、人間不信が強かったりして、どちらかという、自分の殻にとじこもりがちでした」(28歳女性)

「自分は一人の方が気が楽、みんな他人になんの興味関心ない人間ではありません、ましてや『孤独なオレってカッコイイ』みたいな厨二病でもありません。それよりもっとタチの悪い人と交わることに怯えて来た人間です。中学生になったあたりから、集団生活が苦しく感じるようになったあたりから集団生活が苦しく感じるようになって、十年も同じような自分のままです。自分と違う他者を受け入れられるようになることが大人の定義であるとすれば、自分は25歳になっても、今だにそれが出来ないでいる子供です。それがとても恥ずかしいことであることは重々承知しています。それでも、自分と違う他者も受け入れることも、他者に受け入れられる人間に自ら変わっていくことも、一人ではできませんでした。自分を責めることは簡単ですが、結局のところ自分できっかけを作ることが出来ないままふさぎ込んでいた時、今回の合宿型若者自立支援プログラム科の募集を知り、きっかけを求めてお世話になろうとおもいました。(25歳男性)

「昼夜逆転し、ごはんもあまり食べずにいました。それに運動もあまりせず、不健康な生活をしていました」(23歳男性)

「早寝早起きはできていたものの、労働体験は週一回、一年間やった日本点字図書館でのボランティアぐらいで、それをのぞけばほとんど家から外にでないことが多かったです。家の手伝いも買い物の荷物持ちと雨戸の開け閉め以外にほとんどやらなかった」(37歳男性)

「自分が独立して親元から自立したいという僕自身の決断で塾に来ました。今までしてきたアルバイトや技術専門学校でも一人だけ孤立して、周りの人とうまく馴染めませんでした。それをなんとか改善できないものか、親と相談したことがあり、県外で派遣の仕事をしてみたり、旅館の手伝いもやりました。結果的には思い通りにいかずに親に苦勞させ続けました。これからのために何か1つでも自信がついて、それを自分の長所として身に付けばいいと思います。ぼくは口数が少ないのでせめて相手の話をちゃんと聞いてあげて、そこから会話の技術を身に付けたい」(23歳男性)

「うつ状態で退職して以来『ドロップアウトしてしまった』という考えと、それを『無かった事にしたい』という考えが強かった。経歴にブランクが出来てしまうことを恐れ、退職後、1年半ほどは早く就職しなければと焦っていた。しかし、その後は週に一度の通院以外は殆ど外出しなくなり、『～しなければ』という考えの反動からか、何かを欲しいとか、したいと願う気持ちを出来る限り持たないようにしていた。ひきこもってからは、『30代・無職・心療内科に通院中、という状態は、世間から見たら犯罪者予備軍』と思われるだろうという考えや、年老いた両親に養われていることに、罪悪感・後ろめたさを感じていた。そのような考え方から逃れたい、という気持ちだけで参加した」(35歳男性)

「理由は・・・いろいろと考えるだけでは結論が出る訳ないことを自分の中で考えすぎていたかと思う。考えることが悪いとはいえないが考えて駄目なら行動しなくてはいけなかったのにそれが出来なかった。就職したいと思っていたが、どういった仕事がしたいと聞かれたときに自信を持って言えるものをもっていなく、それを見つけそういった仕事に就ければと思い自立塾に来た」(24歳男性)

「自立塾に来た理由として一番大きいのは、感情が入ってしまう家族から離れて冷静に、且つ客観的に見つめていただける他人の目を通して仕事の適正を見てもらうことだった。(29歳男性)

## 2、一番役にたったプログラムは

### 2-1 共同生活 大変だったこと

寮での共同生活は、常に他人を意識して暮らす生活である。また、食事作り、後片付け、部屋を含め、トイレや風呂場の清掃等、みんなでやらなければならない事もあるが、自分の衣服の洗濯等、自立した社会人として生活するために様々なことをやらなければならない。入塾してきた殆どの若者は、昼夜逆転の生活、腹がすいたら、家の人が作った物を電子レンジで温め食べるか、インスタント食品を食べる、食べた後は片付けることはしない。洗濯機は使えない。包丁の使い方もわからずの気促な生活を送り、家族以外の他人と話す

こともほとんど無い者が多かった。

そのため、寮での生活は、ひとつ、ひとつ教えなければならなかった。スタッフも大変だが、自分のことは自分がやるといった大人としての自立した生活が出来るように指導しなくてはならない。そのため、睡眠不足や人への気遣いなど 2 週間位で精神的な疲労がピークに達する。

「体がしんどいので横になりたいです。だけど布団によこになっても落ち着きません。自分が使った物が全て汚いと感じるので部屋の荷物は整理できません。」(23 歳女性)

「最初の一ヶ月は就労体験がなく食事当番や運動が主でした。食事当番は家で全くやったことがなかったので最初のうちはめんどろに感じたけれども、徐々に慣れて行き生活リズムをつけるのに役立った。」(37 歳男性)

「洗濯機の使い方も全く分からなかった私が、今では自分で洗濯ができるようになった」  
(21 歳女性)

「数年ぶりの座学、スポーツ、そして何より同年代の他人との会話することが数年来だった私にとっては、入塾して最初の一ヶ月間はとにかく行動や会話の 1 つ 1 つが時限爆弾解除作業のように思えて、毎日が死ぬ思いでした」(25 歳男性)

「入塾してから 2 週間が立ちました。始めの 3 日ぐらいはここでの他人との共同生活うまくなじめずに大変な思いをした。4 日目の明け方にはストレスで吐いたり、下痢をした。もうどうなるのかと思っていたら、寮のひとがみんな同じ状態だった。」(26 歳男性)

「本当にここに来て大変なことだらけです。食事当番は毎日 3 回あって、あと、あらうこともしなきゃならないので大変です。正直しんどいです」(21 歳男性)

自分で生活していくことがこんなに大変に感じる人の多くは、ひきこもりが 3 年以上の人だった。普通に生活することが出来ない人には就労はできない。でも、それをスタッフの支援や励ましでみんな乗り切っていた。

「この自立塾に来て自分の何が変化したか、生活態度だったり、協調性だったりもあるだろう。しかし、一番の収穫だったには、やはり「働く」ということを学べたことだと思う。そのためには、自立塾では、まず、働くために生活態度と体調管理を徹底しなければならない。これは人から学ぶより、自分の意識の問題で、僕にとっては、これが一番大きな課題だった」(22 歳男性)

「当初は知らない人との共同生活に不安が募るばかりだったが、郷に入れば、郷に従えとの言葉通り、とりあえず決められた活動をしていくうちに友達も増え、笑う回数も増えてきているように感じる。自分の中で何かが変わったという意識はないが、しいて挙げるならば『人間らしい生活』に戻ったということだろうか。朝、起きて、ご飯を食べ、運動もそこそこにして、風呂にも入り…と当たり前の生活が出来ているのがすごく嬉しい。環境や生活態度が変わると、不思議なことにネガティブな発想はあまり出てこなくなったように感じる」(26歳男性)

「こちらに来て2週間ぐらいたって気が付いたのは、生活がきちんとおくれてないのと、あいさつがきちんとできないことです。生活態度を考えておもったのは、今まで何をしていたんだろうということです」(34歳女性)

「私は入塾したばっかの時は、食欲もなくて体重もアフリカ難民なみに痩せていたし、頬もこけちゃってて周りの人から見た私は思わず大丈夫って心配されるような子だったと思います・でも、入塾してからは食欲もでてきて、体重も普通になりつつあります」(21歳女性)

「合宿に参加してから、2週間が経過し、生活そのものには慣れてきたと思うが、対人面での緊張は未だ残っている。しかしけんしゅうや作業等を通じて、自分がしごとをしてきたこと、以前出来ていたことを思い出す機会に恵まれた。引きこもっていたときは、思い出すのも、先を考えることも、考えることもネガティブなことばかりだった」(35歳男性)

「共同生活を通して人間関係の調整力を養うことができました。また、その人間関係を通して、人間と人間とが、お互いに助け合うことの大切さを学んだ」(26歳男性)

## 2-2 座学、グループワーク、適性検査

「自立塾では研修や普段の生活を通して、社会のルールや生きるために大切な基本のことを学べた」(23歳男性)

「僕は履歴書を作るのが下手だったので履歴書の授業は助かりました」(26歳男性)

「グループワーク」は社会勉強になる、自分のコミュニケーション能力の無さが分かった。少人数だとなかなかできない授業だと思った。もっとグループに参加して積極的になるべきだった」(23歳男性)

「研修期間中は講義を受けた。例えば、あいさつ、敬語の使い方などの言葉づかい、お辞儀の仕方、電話の応対など、社会人として大切なことを学んだ」(26歳男性)

「適性検査、適職検査の授業を受け、自分の性格や職業に対する適性を検査し、自分がどのような職業に向いているかをある程度理解できました」(26歳男性)

### 2-3 運動 体力づくり

宇奈月自立塾ではVO2MAXを2台使い入塾時に体力測定を行っているが、多くの若者が体力測定において、厚生労働省の基準どころか、殆どの者が60代の体力であり、中には測定不能の者も多かった。

そこで、就労を目指すために、体力づくりを積極的に行っている。運動としては散歩、ウォーキング、サッカー、ソフトボール、バスケット、ウエイトトレーニング、筋トレ、ストレッチ、バランスボールなどを使いバランストレーニング、登山を行う。

また、年二回、ニート甲子園と称し、ソフトボール大会を各団体共催で全国大会を行っている。

「私は寮生活をしながら個別に作ってもらった筋力トレーニングのメニューに従い、ほぼ、毎日エアロバイク、ベンチプレスをやらせてもらい体力づくりをした」(21歳男性)

「宇奈月ダムまでの散歩はちょうどいいくらいの運動で最初の運動としては適度でした。ストレッチ体操は体のあらゆる部分が硬く、きつく感じました」(37歳男性)

「週に一度の運動とストレッチやるだけで腰痛がなくなったり、体の調子が上向きになることを知った」(31歳男性)

「体力も全くなかった私が散歩とかストレッチとかしたおかげで体力も筋肉も少しはつきました。」(21歳女性)

「記念に僧ヶ岳に登りたかったが登れなかった。平和の像までは2回行った」(26歳男性)

「体力面でもよい方に変わった。体力測定で体力値が3から4に変わり、根気がスポーツによって少し身に付きました」(28歳女性)

「僧ヶ岳登山はもったもかこくでした。開始早々にばてて、本当に死ぬかと思いました。

歩いていて永遠に続くかと思いました。やっとのことで登りましたが、今度は下りがあります。本当にすごかつらかったです」(21歳男性)

#### 2-4 就労体験

生活訓練、ビジネスマナー等の座学、各種検査、体力つくりの後、就労体験先企業訪問の後、地元企業の協力のもと、様々な職種の就労体験先を用意した。

職種としては、農業、漁業（定置網漁）、牧畜業、金属加工、海産物加工、ビール製造、ウエイター、みやげ物販売、ホテルフロント、ホテル客室清掃、ホテル裏方作業全般等あった。訓練生の力量や体力、希望に応じ、訓練効果が上がるように様々な工夫をした。

「今までの仕事が不動産営業のみだった私にとっては、就労体験は貴重な経験になりました。営業の仕事はもちろんですが、特に製品を扱うしごとには一つの失敗も許されません。その中で就労の厳しさを実体験で知ることが出来たことに大変満足した」(32歳男性)

「就労体験はホテル内の業務や牧場、工場内での作業など、いくつかの職場をまわりました。仕事内容を理解し、働くことへの充実感を得ることができた。(26歳男性)

「就労体験という仕組みは本当にありがたかった。どの就労体験先もアットホームな雰囲気です。都会のギスギスした雰囲気とは違って印象的でした。また、対人関係において相手にきちんと説明できる会話能力が必要であることを学んだ」(31歳男性)

「就労体験先で不安とストレスで壊れそうになった時、スタッフの方が仕事にもかかわらず、手を止めて話を聞いてくれアドバイスをしてもらった事に今はただ感謝している」(33歳女性)

「就労先で一番嬉しかった仕事の合間でも、ここに居ることで気分転換になってくれたらと私が疲れて見えたのか気を使ってくれ、人の優しさを感じることができた」(28歳女性)

「就労体験をしているうちに、分からない事や自信のないことは人に聞き、教を乞うた方が確実に出来るし、失敗を少なくできる。また、自分の目で他の人がどのようにやっているのかを見て自分で考えてやるのが大切だと実感した」(30歳男性)

「様々な職場での就労体験は、良い経験なただけでなく、今まで出来ていたこと、できることを確認することができ、良いリハビリになった」(34歳男性)

「就労体験をさせていただいて少し思ったのは、働く喜びとお金の大切さを学んだ」(34歳女性)

「定置網漁の就労体験は自分にとってとても自信につながった」(25歳男性)

「就労体験が始まり、きちんとしごとが出来るかどうか不安と緊張でいっぱいでしたが、就労先の全ての方々とても親切に教えてくださり、本当に良かった。また、朝が早い日が続いた時は就労中も眠くて、辛いこともありましたが、その分、働くことの厳しさを学びました。最後に社員の方に「本当に助かった」といわれた時は、少し自身が持てたような気がしたし、働かせていただいたことに感謝の気持ちでいっぱいになりました」(20歳女性)

「就労体験は6ヶ所ほど体験させてもらった。それぞれの場所でさまざまな仕事を体験させてもらったことがよかった。特に漁船に乗り漁を手伝わせてもらったことはなかなか体験出来ない事なのでいい体験をさせてもらった。また、残念ながら体験させてもらった仕事に自分はこれだと思える仕事はなかったが、仕事においてその仕事が自分に合うかというのはもちろん重要だが、人間関係が良好であればどういった仕事でも頑張れるのではないかと感じた。そして、いろいろな人の話を聞くことができ、仕事に関してだけでなくこれからの人生においてとても参考になった」(26歳男子)

## 2-5 就職活動

就労体験先で人材を募集していて企業側がこの人を採りたいという希望と本人が希望すると就労体験先に就職することもあった。また、寮長の知人の会社に就職する者もいた。さらに当 NPO 法人の理事の紹介や理事の会社が採用した事例もあった。それ以外はハローワークを使っただけの就職であったが、就職へのアドバイスや採用試験に対する対応を行った。

## ニートの意識構造と就労

宇奈月若者自立塾修了生 132 名を通しての研究

牟田 武生	特定非営利活動法人教育研究所理事長
久玉 和昭	特定非営利活動法人教育研究所研究員
牟田 光生	宇奈月自立塾寮長
大場 隆広	臨床心理士

ニートの意識構造と就労  
宇奈月若者自立塾修了生 132 名を通しての研究  
2012 年 1 月

発行者 特定非営利活動法人教育研究所  
理事長 牟田武生  
神奈川県横浜市港南区丸山台 2-26-20  
Tel 045-848-3761 FAX 045-848-3742  
Email [contact@kyoken.org](mailto:contact@kyoken.org)